



病院の機能と図書館への期待

社会保険神戸中央病院院長 中村 充男

最初にお断りしておきたいのは、私はこれ迄医学文献の複写における著作権の問題など考えたことがなかったので、本シンポジウムの演者として全く不適切であると固辞したところ、病院管理者として病院図書室への想いや、期待される将来像も含めて喋ってよいとのお許しを得たので参加させていただいたという次第である。

まず、当院の概況を表1に示す(表1)。当院は、人口約23万人の神戸市の北区のうちの南部地域の医療の中心を担う国有民営施設と位置づけられている。緩和ケア病床、開放型病床、人間ドック病床を含めて424床で、一日平均外来患者数は約1,300名である。

政管健保の被保険者と、その家族の生活習慣病健診を行う健診センター及び附属診療所、訪問看護ステーション、介護老人保健施設、附属看護専門学校を併設して、急性期医療、保健予防活動及び老人福祉を一体として担当し、揺り籠からターミナルケア迄の幅広い住民のニーズに応えられる総合医療センターを目指している。

WHOの病院の定義によると、病院とは、医療、公衆衛生活動、教育並びに研究を行う所で、その外来活動は家庭に居る家族にまで及ぶべきであるとされている。また、政府管掌健康保険福祉事業に関するあり方懇談会は、平成9年にその答申で社会保険病院の今日的役割として、

表1. 当院の概況

病院の概要	
1. 所在地	神戸市北区
2. 設立	社会保険庁
運営	全国社会保険協会連合会 } 国・民営
3. 15診療科	
病床数	424床
	(含 人間ドック 16床 緩和ケア病床 22床 開放型 5床)
年間退院患者数	約5800名
1日外来患者数	約1300名
4. 併設施設	
	健診センター、附属診療所
	介護老人保健施設(100床)
	訪問看護ステーション
	附属看護専門学校(1学年35名)
5. 厚生省指定卒後研修病院	
	各学会指定専門医教育病院
	京府医大・神大医学部学生実習病院
	各診療協肋部門学生実習病院
	病院機能評価機構 一般B認定病院

社会保険診療の定点観測点となること、診療分野においては民間医療機関が提供しにくい分野をも含めて模範的・試行的・実験的取組みを積極的に行って、尚且つ施設毎の独立採算制の堅持を求めている。

私共もその役割を全うするべく、日夜努力しているが、民間が取り組まない分野には非採算性のものが多く、この厳しい医療環境の中で経営に苦しんでいる。

病院倫理は表2に示す通りで、公私を問わず、営利を目的とすることは医療法でも禁じられており、且つインフォームド・コンセントや

表 2. 病院倫理

病院倫理
公共性(営利を目的としない)
質の保証
安全性

表 3. 当院医学資料室の概要

当院医学資料室の概要
図書室 67.2m ² >併設
診療録管理室 102.9m ² >
職員数
司書, 診療情報管理士兼務 2名
診療情報担当事務員 1名
医局メンテナンス担当嘱託職員 1名
蔵書数 約2200冊
購入雑誌数 150タイトル

EBMに基づく標準的な良質で安全な医療の提供が義務づけられている(表2)。この様に、一般病院といえども少なくとも研修指定病院では医療、公衆衛生活動、教育、臨床研究を行っているわけで、重点の置き方こそ異なっているけれども、大学並びにその附属病院と何ら遜色がないどころか、一般の大学が行っていない公衆衛生活動や在宅医療支援なども実施しているわけである。

更に今後、大学も独立法人化に向けて診療に力を注いで採算性の向上に努めると思われる一方、研修指定病院も卒後教育の義務化と医学生卒前教育への参加などで一層教育機能の充実強化が求められており、両者の役割は更に接近するものと予測される。

従って、大学医学図書館と私共の病院図書室の役割は全く同等であるべきであって、本シンポジウムのテーマである著作権法の問題でも、同等に扱って頂きたいというのが私の第一の主張である。

次いで、当院の医学資料室の現状と問題点、更にその解決法についての要望を述べる。当院では図書室は独立しておらず、診療録管理室と併設で、職員も兼務である(表3)。問題は今回の診療報酬の改訂で30点と僅かではあるが、診療情報管理料が加算されたことと、当院も時流に逆らえず、今年度から診療情報開示に踏み切ったことで、診療録の整理や退院時サマリーの督促などの仕事(出来ていなければ返還が求

められる)や、来るべきDRG/PPSに備えてICD-10によるコーディング、入力が強化され、業務量が拡大したため、図書業務に手が回らなくなったことである。参考までに当院医学資料室の林¹⁾が行ったタイムスタディの成績を示す(1997年当時、現在年間退院数は約6,400へと増加)(表4)。

表 4. 一日あたりの時間配分

一日あたりの時間配分			
	a	分(件数)	b (担当者3名)
	業務内容	分(件数)	業務内容 分
	診療録台帳 フォルダー	20 (25)	図書受入 5
	内容チェック	130 (25)	雑誌受入 13
	データ入力	45 (25)	相互貸借 (借)
	入院カルテ貸出	135 (27)	(貸) 7
	返却	40 (27)	8
	書類関係	60 (15)	製本 8
	サマリー回収	40 (20)	その他の業務
	疾病分類	125 (25)	医局関連 110
	サマリーコピー 貼付 保管	109 (25)	スライド管理
	カルテ製本収納	60 (25)	ワープロ
	カード整理	20 (20)	資料作成
	カルテ関連	79	郵送業務
	計	860	医学雑誌
			その他 155
			計 306

設定数	退院数 5600	図書受入 年 75冊
算出方法		雑誌受入 月 130冊
a. 1件あたりの平均処理時間×一日平均件数		相互貸借
及び一日平均処理時間数		(借) 380
b. 年間総時間数÷勤務日数		(貸) 120

然るに、電子媒体を含めて取扱う情報量は本日のシンポジストの首藤によると“爆発的”に増大しており、他方、患者・家族の知る権利や自己決定権の尊重でインフォームド・コンセントや診療情報開示の流れも一層加速する状況にあり、急増する医療訴訟対策上からも、EBMやクリティカルパスに基づく安全な標準的医療の提供が求められる中で、病院図書室の役割は一層重みを増すものと思われる。

対策としては担当職員の研鑽による資質の向上で対処できなければ、増員が必要となるが、現在の厳しい環境の下では増員は不可能である。

そこで、医療法や研修病院指定基準に病院図書室の設置が義務づけられ、また、病院機能評価の質問表にも図書室機能に関する8項目が設けられており、良質の医療の提供に病院図書室の必要性が公に認められているわけであるから、従来、非採算部門として“日陰者”であった図書室を陽の当たる場所とするために、せめて研修指定病院では、図書室機能（職員数、蔵書数、購入雑誌タイトル数、文献取扱量、レファレンス機能等）に応じて、診療報酬上の配慮（加算）を実施して頂きたいというのが第二の主張である。

最後に今後期待される病院図書室の役割についての私見を箇条書で示す（表5）。①と②については従来も行われて来た業務であり、特に述べるまでもないが、レファレンス機能を除

いてはこれらの機能は今後消えて行くであろうし、そうなって欲しいと考えている。即ち、図書購入も刊行雑誌数が激増し、また外国雑誌の価格は高騰しており、一病院が購入できるのはごく少数のコアジャーナルとならざるを得ない。又、保存スペースの問題で保存できる書籍数は限られてくる。相互貸借による文献複写での入手法は現在では一部の図書室の多大な犠牲とサービスに依存しているため、軋みがないとはいえない状況にあると聞く。更に複写には本日のテーマの著作権の問題が絡む。

望まれる対策としては、JMLAや東大図書館の金沢一郎館長²⁾が強く要望しておられるNLMに匹敵する国立医学図書館を設立して、著作権協会と契約の下に、必要な情報や文献を一方的に各施設に提供して貰えるようになれば、マンパワーの問題も含めてこれらの問題はすべて解決するというのが私の第三の主張である。

また②の文献検索業務も今後は利用者が自室の端末機からネットに接続して自ら検索を行う様になれば消失してゆくものと予測される。

次いで③の医師だけでなく、コメディカルの職員への教育やレファレンス等のサービスの充実が今後重みを増すと考える。

④は私が今後の図書室に最も期待する機能である。

野添³⁾は、21世紀の図書館像としてMatheson⁴⁾の第3段階（表6）、即ち収集または検索された情報の評価を行うことが要求されかつ

表5. 今後の病院図書室に期待される役割

【今後の病院図書室に期待される役割】
① 電子ジャーナルを含む図書の購入、保存、複写
② 文献検索と図書館利用教育を含めたレファレンス機能
③ 看護職を含むコメディカルのニーズにも応えうる図書室
④ 読むべき文献の選別が出来るインテリジェント・センター機能 (Matheson第3段階)
⑤ 病院のナレッジサーバー及び医療情報センターとしての機能
⑥ 病診及び病々連携の一助として、地域の医療従事者への図書室の開放
⑦ 患者・家族及び地域住民からの医療情報提供の要望に適切に対応できる地域に開かれた図書室

表6. 未来の医学図書館へのシナリオ

未来の医学図書館へのシナリオ (Matheson N.W. 1980)
第1段階：近代的情報資源センター
第2段階：情報マネージメント・センター (デジタル図書館)
第3段階：インテリジェント・センター (知識マネージメント・センター)

重要任務になると1980年に既に予測していると述べている。

この情報洪水の激流に、ややもすれば押し流されがちな私達多忙な利用者は切実に医学図書館にこの機能を求めている。即ち、情報量は激増する一方で、読書に充てられる時間はむしろ減少する傾向にある中で、多くの情報の中から読むべきものの選別をして欲しいというのが私の願いであるが、過大な要求であろうか。掲載誌のインパクトファクター、研究の内容、即ちEBMに応用できるRCTであるか、症例数は如何程か、或は単なる症例報告か等の判別は司書にも充分可能ではないかと考える。

⑤については偶々私共の施設がそうであるが、長谷川⁵⁾によると診療情報管理の概念が確立し、それを可能にする情報の電子化が進んだ結果、図書室機能を診療情報管理室の下に集約しようとする試みがなされるようになったと述べており、また本フォーラムの挨拶で粉川会長の国立京都病院でもこの度、図書室、病歴管理室及び医事課の一部を統合し、医療情報管理の中心としたと述べておられる。

私も今後の病院図書室には病院のナレッジ・サーバーとして、医療情報の収集・整理・発信の機能を担って欲しいと考えている。

⑥⑦は記載した通りで、特に付け加えること

はない。

むすびにかえて

図書を整理保存し、文献をコピーするだけの図書室は消えても、患者に安全良質の医療を提供するために、病院職員の人材開発を支援し、病院のナレッジ・サーバー及び医療情報処理の中心としての図書室は必要欠くべからざる存在となるであろうというのが私の最後の主張である。

参考文献

- 1) 林 伴子：図書室兼務の立場を考える－診療録管理との兼務、ほすびたるらいぶらりあん、1999；24(4)：293-294.
- 2) 金沢一郎：国立医学図書館の必要性、医学図書館、1999；46(4)：381-384.
- 3) 野添篤毅：デジタル時代を迎えた21世紀の医学図書館、医学図書館、1999；46(4)：356-365.
- 4) Matheson NW, et al: Academic information in the academic health sciences center. Roles for the library in information management. J Med Educ. 1982；57(10 Pt 2)：1-93.
- 5) 長谷川友紀：病院機能評価における病院図書室、病院図書室、1999；19(3)：118-122.